「教皇フランシスコ」について学ぶなら▼この三冊！

有村浩一（ありむら・こういち：カトリック中央協議会職員）

いよいよ、教皇フランシスコの来日が間近となってきました。日本にローマ教皇がやってくるのは、一九八一年二月に当時の教皇ヨハネ・パウロ二世が訪れて以来、三十八年ぶりのことです。この歴史的イベントを前に、教皇になって以降のフランシスコを知るための三冊を紹介します。

教皇フランシスコ『ラウダート・シ』

まず、教皇本人の公文書から。教皇フランシスコは就任以来これまで、主な公文書として、二つの回勅（全カトリック教会にあて、信仰生活の指導などを目的とする重要度の高い教書）、四つの使徒的勧告（バチカンでの世界代表司教会議後に、霊的生活の特定の面に関し、進歩するよう励ます勧告）を発表しています。二〇一五年発布の『ラウダート・シ』は二番目の回勅ですが、最初の回勅、『信仰の光』が前教皇ベネディクト十六世から引き継いで完成させたものであることを考えると、本回勅こそ、教皇フランシスコが最初に取り上げるべき主題だったのでしょう。

そこで扱われているのはエコロジーの問題で、大気や海洋などの汚染、生物多様性の喪失、地球温暖化や人類の使い捨て文化の問題など、人間の活動が被造界全体に与える影響について論じています。しかし単に「自然を大切に」という議論ではなく、環境問題が、平和、貧困・正義の課題といかに密接な関係性にあるかを訴え、それに包括的に取り組む「総合的エコロジー」（第四章）を呼びかけています。「大地の叫びと貧しい人の叫びの双方に耳を傾ける」（四六頁）ことが前提になっているのです。「貧しい人々の優先」は本回勅の根本精神です。

環境、正義、平和についてさまざまな勧めが述べられていますが、それらを「提案」としているところがポイントで、「教え」を強要する代わりに、現場の状況と人々との「対話」を通じて勧めを具体化するよう教皇は呼びかけています。これは「責任」が各所で強調されていることも関係があり、良心に基づく各自の判断を尊重する、教皇の倫理的アプローチの特徴が現れています。したがって、画一的な理想論を述べているのではなく、「皆が共に暮らす家」の兄弟姉妹として、共通善のために連帯していく必要性を唱えています。

今回の教皇来日テーマ「すべてのいのちを守るため」は、本回勅巻末に収められている「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」から取られています。教皇を迎える準備のためにもなる一冊です。

森　一弘『教皇フランシスコ』

次に、東京教区の森一弘名誉司教が、教皇フランシスコの発言の真意や背景などを丁寧に解説している一冊。これは、『家庭の友』誌に二〇一七年三月から二〇一八年十二月まで連載された記事をまとめたもので、主に、二〇一五年十二月から二〇一六年十一月の「いつくしみの特別聖年」、二〇一三年に発布された使徒的勧告『福音の喜び』、二〇一六年に発布された使徒的勧告『愛のよろこび』について解説し、最後に、上記『ラウダート・シ』にも触れています。特別聖年中のさまざまな発言や、これら公文書における教皇のことばから、その言わんとすることや人となりを森司教は解説し、興味深く、分かりやすいものです。

まず際立つのは、教皇の姿勢は「『先に教会ありき』でも『先に教義ありき』でもなく……『先に人ありき』なのである」（三四頁）という点です。「教え」の厳格さに固執し、「裁く教会」に陥りがちな現代教会に対して、もっとも助けを必要とする人々のためにある、その人たちとともに歩む教会であることを繰り返し訴えている、と述べています。これは、結婚離婚の問題を扱っている『愛のよろこび』でもたびたび語られていることです。教会は「傷を負った人々に気を配る野戦病院のようでなければならない」（三三頁）という有名な教皇のことばも、これを裏付けています。こうした姿勢の背景には、教皇がアルゼンチンにいた間に経験した、現場での司牧体験、とくにスラムなどの貧しい人々とのかかわりが土台となっていると記しています。

こうした姿勢は、教皇がその住まいをバチカン宮殿内ではなく、バチカン勤務の他の聖職者や来訪者が宿泊する聖マルタの家に定めたことや、教皇専用車から防弾ガラスを取り払ったこと、聖木曜日に行われる「洗足式」をローマ市内の少年院で行い、非キリスト者や女性の足も洗ったことなど、豊かなエピソードにも現れています。

現在の「病んだ教会」（六六頁）を、生き生きとした奉仕する教会へと改革しなければならないという訴えを繰り返していることも強調しています。こうしたことばは教会権威への痛烈な批判となり、反発する伝統的聖職者も多いわけですが、一方で、こうしたことばに信徒らが単に溜飲を下げているだけではダメなことも森司教は指摘します。教皇が発する危機感と改革の緊急性はすべての信者が共有すべき呼びかけなのであって、一人ひとりが自分にはなにができるか、を教皇は厳しく問うているわけです。

最後に少しだけ触れている『ラウダート・シ』について、面白い指摘があります。この回勅の題名が取られたアシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」は、晩年、苦悩の闇の内に書かれた、ということです（二六二頁）。その背景を知って同回勅を読むと、また違った味わいと発見がありそうです。

教皇フランシスコ／ドミニック・ヴォルトン『橋をつくるために』

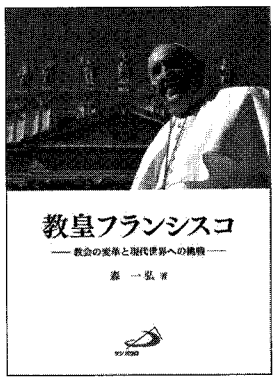
本書は、フランス人社会学者D・ヴォルトンが、二〇一六年から一七年にかけて行った教皇との十二回のインタビューをまとめたものです。原題が『政治と社会』であるように、二人の対話の内容は、戦争、政治、グローバル化、宗教原理主義、移民・難民、諸宗教対話など、現代社会が抱える多岐に渡る諸課題に触れており、これが八つの章にまとめられ、それぞれ関連する教皇の演説二つの抜粋が、対談内容を補う形で付記されています。他方、（残念ながら？）「教会内部の政治的・組織的対立については、ここでは言及されていません」（九頁）。教会改革を断行するなか、孤軍奮闘しているかのような現教皇の苦悩は別の資料に譲ることにして、本書では、カトリック教会のリーダーとして現代社会に対峙する教皇の姿勢がよく現れています。たとえば、使徒的勧告『愛のよろこび』の「迎え入れ、寄り添い、見極め、受け入れる」（第八章）という鍵概念はその一つの表現でしょう。具体的な箇所をいくつか紹介します。

「戦争」に関する第一章では、教会が政治にコミットすることは「愛徳の最高の形」だと、その重要性が強調され、しかし「党派的政治には関わるべきではない」と、その区別は明確です。「教会は民衆の中に入っていかなければなりません」というのが明快なメッセージとなります。そこには、邦題になっている「橋をつくること」の意義も登場します。「わたしたちは皆移住者です」という「移住者（ゲール）の神学」に言及しているのは印象深いことです。

「伝統」について語る第七章では、伝統が静的なものではなく、成長し、純化し続けるものであり、伝統と保守主義とは違うことで二人の意見は一致します。しかし社会学者のヴォルトンは、教会の新たな伝統として、貧しい人の優先や労働の価値などを訴えても、「コミュニケーションの行き違い」により社会に認識されることの困難さも指摘します。教皇はこれに対し、「決疑論」と呼ばれる罪のリストに照らして禁止事項を押しつけるようなことを止めて、それぞれの場で教会の福音的価値観、たとえば「迎え入れ、寄り添い、見極め、受け入れる」ことを生きる大切さを訴えています。

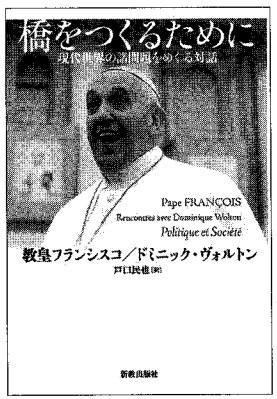
『ラウダート・シ』
――ともに暮らす家を大切に

教皇フランシスコ：著
瀬本正之、吉川まみ：訳
カトリック中央協議会
2016年刊
四六判240頁
1400円（税別）



『教皇フランシスコ』
――教会の変革と現代世界への挑戦

森　一弘：著
サンパウロ
2019年刊
B6判304頁
1400円（税別）



『橋をつくるために』
現代世界の諸問題をめぐる対話

教皇フランシスコ、ドミニック・ヴォルトン：著
戸口民也：訳
新教出版社
2019年刊
四六判421頁
2600円（税別）